○觀艦式拜觀　十月二十三日に施行せられたる東京灣の觀艦式拜觀のため、本校にては拜觀の場所を鶴見停車場の南方なる、神奈川縣橘樹郡生見尾村二見臺の中腹にトし、有志の者は同所に集合して拜觀せり。同所は式場の正面に當り、艦船離合の狀況等明瞭に知るを得たり、式場の光景等は當時の新聞紙上等にあるを以て今茲に之を贅せず。

○本年秋季の修學旅行　本年の修學旅行は群馬縣下榛名妙義地方と決定せられ、十月三十日午前六時五十分を以て、職員生徒一同上野驛を出發し、午前十時四十分前橋驛に着しぬ。前橋よりは徒歩して利根河の沿岸を遡り、澁川村を過ぎ伊香保に至りて一泊す、翌三十一日は伊香保を發し、清溪のほとり、錦なす紅葉の山間を經、或は見渡すかぎり尾花のうらがれし山路をたどりて、榛名湖畔に出で、榛名神社に詣でゝ寶物を觀覽し、榛名町に宿れり、明くれば十一月一日なり、此日は七里の山路を踰ゆるなればとて、朝七時前より榛名町を出發す、妙義町に至るの間は唯迂餘たる山坂のみにて、さしたる眺めあるにもあらず、面白からぬ道なりき、妙義町にやどりし翌日（二日）は、名にしおふ妙義の山巡りなればとて、携へし荷物は皆宿屋に託し置きて各身輕に出でたち、朝の六時より登り初め、金洞山（一に中の嶽といふ）を跋渉し、或は妙義山（大字のある山）を攀ぢ、妙義神社の寶物を觀覽し、それより松井田の停車場に出で、瀘車にて歸京す、上野に着したるは二日の夜九時頃なりき。此行伊香保の入口なる美仙橋の滸に於て、同人十數名にて兎を生捕りたるが如きは時に取りての好獲物にして、旅行に大なる興味を添へたり。

○職員生徒の奉送迎　十一月十四日伊勢へ　行幸あらせられしに付、當日本校職員生徒一同は、櫻田門外遞信省用地前へ集合して奉送せり。同十九日　御還奉の時も同樣奉迎す。

○凱旋門裝飾の依囑　下谷區にては今回上野公園入口に、半永久建設の凱旋門を作ることゝなり、其裝飾の圖按及雛形製作を本校へ依囑せられたるを以て、古宇田〔実〕教授主として之に當り設計中なりしが、此程考案も決定したるを以て、不日建設の運びに至るべし。其設計の大躰はクラシック式の門にして、總高さ七十尺、間口八間奥行四間、上部の中央に勝利神を置き、其左右に模樣風の獅子を配し、ペディメントの中に翼を廣げたる金鵄を据え、內部天井に壁畫を圖する筈にして、夜間は附近の高處より、探照燈を以て之を照らすの計畫なりといふ。

関連事項

①　工芸化学教室整備と大築千里起用

本校では従来工芸各科の生徒に、「応用化学」の授業を課し、上原六四郎が指導にあたっていたが、明治三十八年七月、上原は嘱を解かれ、同年十月に大築千里が教授として起用されるや、急拠研究、教育体制の整備がすすめられた。後出「東京美術学校近事」（335頁）に記されているように、従来鋳金科の一部にあった化学室を廃し、工芸科塑造教室（護国院寄りの一棟）を増改築して工芸化学教室とし、教育に必要な設備を整えたのであった。

大築千里は明治六年東京小石川に生れ、同三十年東京帝国大学工科大学応用化学科を卒業。陸軍技師（東京砲兵工廠製造所所員、目黒火

薬製造所付）をへて同三十二年京都帝国大学理工科大学助教授となり、同三十四年十月ドイツへ留学し、同三十八年十月帰国して本校教授となった。同四十三年三月に京都帝国大学理工科大学教授として転任している。

大築は本校在職中、本務の傍ら特に写真の科学的研究につとめ、そのための設備も整えた。そして、明治三十九年には校友会に大築の指導による写真部ができて盛んに写真展を開くようになり、また、校友会月報や作品集その他校内の出版物の写真において工芸化学教室や写真部の活躍が始まった。これらのことが土台となって、大正四年に本校に臨時写真科が誕生するのである。

本校に於ける大築の写真研究は正木直彦校長のバックアップによるものであった。大築の履歴書（本学蔵）には「同〔明治〕三十五年八月一日美術工藝ニ関スル應用化學研究ノ爲滿二ヶ年間獨國へ留學ヲ命ス」と記されており、主目的は工芸化学の研究であったが、留学に際して正木は特に写真術の学理的研究を依頼した。このことは大正四年二月十三日付『時事新報』に掲載された臨時写真科設置に関する談話の中で正木自ら述べている。かくて大築はベルリンのTechnische Hoch-Schule の Miethe 教授の写真化学教室で研究をとげ、帰国早々本校教授となるが、このことも留学中から約束されていた様子である（鎌田弥寿治著『日本写真教育史』昭和五十年。東京写真大学短期大学部出版部）。そして、これは本校校長に就任して間もない頃の正木が芸術の科学的研究および写真研究の方面に力を注いでいたことの証しといえよう。正木は大築の帰国を待ちつゝ、その間の明治三十五年から同三十八年まで本校年報に於いて化学教室新設要求を続け、準備をすすめたのであった。

② 藤島武二の留学

明治三十八年九月二十日、助教授藤島武二は満四ヶ年間フランス、イタリー両国留学を命ぜられ、同年十一月十八日に出発した。西洋画科では最初に岡田三郎助が、次いで和田英作、浅井忠が国費留学生に選ばれ、浅井は帰国後京都高等工芸学校教授となり、岡田、和田は本校教授に就任した。藤島も当然留学生に選出されるべき立場にあったが、浅井のあと、本校からは下村観山、桜岡三四郎、白井雨山、白浜徵ら他科の教官らが国費留学生に選ばれ、藤島に順番が回って来たのは岡田の留学より八年も後のことであった。

藤島の履歴書（本学蔵）には留学中の修業に関して左の記述がある。

同〔明治〕三十九年　月　日　佛國々立美術學校入學　教授コルモン f. Cormon 氏ニ就キ油繪ヲ學ブ
同四十一年　月　日　伊太利ヘ轉學　在羅馬カロリユス、ヂユラン Carolus Duran 氏ニ就キ油繪ヲ學ブ
同四十三年一月廿六日　歸朝

黒田清輝、久米桂一郎、岡田三郎助、和田英作らはいずれもラファエル・コランに師事し、藤島も黒田からコランを尋ねるようすすめられたが、彼は敢て別の師を選んだ。左記は藤島の回想記の留学